

欲生心の象徴的自覚

10

本多弘之

honda hiroyuki

浄土教を成り立たせている宗教的意欲は、言うまでもなく「浄土への願生心」であるが、その願生心を親鸞は凡夫から起きる直接的意欲ではなく、「如来回向の欲生心」であるとされた。なぜ如来回向と言うのかということ、親鸞の思想を読み解くためには、どうしても説明しておかなければならない必須の課題で

ある。それについて、いろいろな角度から考察してきたことではあるが、ここでもう一度、親鸞思想を尋ねるについての基本姿勢を、いくつかの面から検討し直しておきたい。

第一には、浄土教は大乗仏教の智慧を一切衆生に開放するために、大悲の願が見いだした方便の表現であることを見失わないことで

ある。親鸞は、浄土真宗こそが「大乗仏教の至極」であると確信されたのであるから、浄土の教えは仏教の求道の究極的な表現であるということである。

仏教が言い当てている宗教的な真理性とは、衆生の苦悩の根源を衆生自身の意識に付帯する無明にあると自覚して、その無明の闇を破



ること（菩提〔bodhi〕の智慧の獲得）ができれば、衆生は自己の生存を、苦悩を超えて生きていけるところにある。苦悩する存在を取り巻く情況や事情を変えることによって救済されるのではなく、苦悩する自己自身の意識転換による存在変革によつて、生死の命に大涅槃の真理が恵まれていることを自覚し証明する存在となるということである。だから、大乘仏教の根本標識は「生死即涅槃」と顯示されるのである。その転換された生存を、安田理深は「存在の本来性」という言葉で表現して、願生の意欲とは、自己の本来性へ還らんとする意欲である、と明示した。

第二に、浄土教においてわれらに要求される衆生の自覚ということがある。仏教の道理としては、無明を暗らせば（菩提を得るなら）真如一実の本来性（大涅槃）を取り戻せると教えられるのであるが、現実のわれらの実存は、「煩惱具足」の身、「宿業因縁の罪業性」の身だということである。これが人間存在の本来性を覆つて、無明の闇の生存（非本来的自己）にしているのであり、いかに努力しようと、いかに真摯に教えに従つて修行しようとして、この実存的な事実の闇の深みを破ることができないという悲しい事実がある。いわば、大悲が方便して浄土の教えを開示せざるを得なかつたのは、この罪業をもつ衆生への深い憐憫だったのであろう。

第三点としては、この真理性と凡夫性との矛盾相克は、凡夫の側からは決して突破することができないという不可能性の質があること。しかしそれを突破させようとする大悲願心が、あたかも凡夫の他者なる如来が、凡夫の本来性を獲得させるための場所を開いて、浄土の教えとなるという形の物語が、『無量寿経』であるということであろう。それで『無量寿経』の教えは、大悲が開く場所（涅槃のはたらきを象徴する浄土）への道を、称名一つを選んで衆生に「正定業」として呼びかける、と善導は証知した。その善導の教えに従うなら、それ以外の条件は（菩提心すらも）不要であると了解したのが、法然であった。すなわち、衆生はもつぱら如来の本願を信じて念仏一つで往生すれば、仏道の課題が成就するのだと、本願の教えを受けとめたのである。

しかし、そのみでは菩提を獲得することでは仏教の真理性を回復するという仏道の道理が見えなくなる。すなわち、菩提を要求する菩提心をも不要とするなら、仏道ではなくなる。このことを強く指摘し法然を批判したのが、明恵の『摧邪輪』であった。菩提の智慧を求めることが、仏教に帰依して仏道を求め、自己の本来性を回復しようとする仏法なのではないのか、と。

この課題を受けて親鸞は、願生心は菩提心

であるという曇鸞の言葉を大切にして、願生心とは真実の信心のことであり、真実信心は大菩提心であるということを開言するのである。ただし、罪業の凡夫が起す願生心は、どこまでも雑毒雑心であり虚仮諛偽の凡夫心である。罪障深い凡夫には、いかにしても純粹な願生心を起すことはできないのではないか。そうならば、せつかく大悲が浄土を建立しても、そこに往生するべき衆生には、浄土への因縁が結ばれないのではないか。このアポリアを突破するために、親鸞は『浄土論』の「回向門」を手がかりとして、本来性への純粹意欲は、凡夫を撰取しようとする法蔵願心から超発するのだということ、「如来回向」という考え方を提示したのである。

純粹なる菩提心は、一如から発起する法蔵願心なのだと信ずることによつて、『無量寿経』の法蔵願心の物語は、大乘仏教の道理を衆生に具体化しようとする本来性自身の発願修行の物語であるということになる。迷いの衆生から発起するのでなく、大涅槃の側から衆生を大悲する巨大な願心の運動が立ち上がるのである、と。「斯願若起果 大千応感動」（重誓偈）と言われる所以であろう。この願を果たし遂げることが、三千大千世界が感応して、あらゆる存在が激震すると言っているのである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長